

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 25 年度
氏名	姜 仁寧	指導教員	池田 広子

論文題目	日本語・韓国語バイリンガルのコード・スイッチングに関する研究
------	---------------------------------------

本文概要

1. 研究目的と背景

本研究は、日本語・韓国語バイリンガルの韓国語母語話者を対象とし、コード・スイッチング(CS)を含めた言語使用における意識構造を追究したものである。具体的には、日本における韓国語・日本語バイリンガル韓国語母語話者(以下 BKNS と呼ぶ)の「CS」、「CSを含めた母語使用」、「日本語使用」の3点に関する意識を調査した。臨界期を過ぎてから来日した成人のバイリンガリズムに関するものは、中間言語、第二言語に目を向けやすくなり、成人の母語については年少者の母語維持に対する関心に比べ、欠けていることが現状である。滞在が長期化する成人韓国語母語話者の揺れていく母語能力について彼らがどのような意識を持っているのかを調査することにより、その意識に照らし出される言語行動を知ることから、異文化理解にも示唆できると考える。

2. 研究方法

調査対象は、都内で生活している BKNS10 名である。日本語を第二言語として生活している。全員成人になってから来日し、都内の新大久保にある某韓国語学校で韓国語の講師をしている。2013 年 10~11 月の約 2 か月間、調査者と 1 対 1 で面談し、研究協力の承諾を得た上で半構造化インタビューを実施した。データはレコーダーに録音し、全て文字起しした。韓国語で文字起しをした後、日本語に翻訳し、2 言語のデータを作成した。

分析方法は 2 つ採用した。1 つは、質的分析法の修正版グランデッド・セオリー・アプローチ(以下 M-GTA 木下 2003)を採用し、この手順に従って分析を行った。2 つ目は、「概念と調査対象者の関係表」による分析を行った。M-GTA の場合、概念を生成した全体像を把握することは可能であるが、複数を対象とした研究の場合、調査者と概念を結ぶ全体像を把握する機能が欠けていると判断し、個人別の意識のつながりを表にして分析した。

3. 分析結果と考察

分析の結果、5 つのカテゴリー(忘れていく母語、CS に対する姿勢、韓国語の使用、日本語の使用、バイリンガルの日本人に対する話し方)、14 のサブカテゴリー、38 の概念が包摂された。概念図(BKNS の二言語使用及び CS における意識構造)とストーリーラインを基に以下のことが明らかになった。

第一に、BKNS が CS に起こすことと、母語の言葉を忘れることの両者は互いに影響を及ぼすと意識していることが分かった。つまり、BKNS 同士のコミュニケーション場面で母語の言葉が思い出せない場合に CS を起こすとし、その際思い出せなかった母語の言葉はそのまま忘れられ、意識的に忘れた言葉を探さなければ、その後も CS を起こすことになるのである。第二に、BKNS の母語使用に関する意識は、CS を起こした話し方に関する意識と、母語のみの使用に関する意識といった 2 つに分かれる。前者に対しては、肯定・否定的な姿勢の間で葛藤をしており、否定的な姿勢になった際には後者に影響し、CS を起こさない母語使用を促す。第三に、BKNS は日本語の使用における場面で「困る」、「困らない」といった両極の意識を持っていることが分かった。第四に、BKNS が二言語の内どちらかを選択し、使用する際に影響を及していると意識している要因は、選択言語により異なることが示唆された。

以上の結果から、母語である韓国語に関する意識、日本語使用に関する意識、CSに関する意識、BKNSに対する言語に関する意識の4つに関する意識の構造が確認され、それぞれの意識は互いに影響を及ぼしていることが明らかになった。

4. 今後の課題

本研究で対象としたBKNSは、韓国語学校の講師を職業として共通点をもつ人たちであり、限られたコミュニティ内の対象者である。調査対象者の属性によっては本研究で試みたBKNSの意識調査の結果は異なると予測され、本研究で調査した内容はBKNSの全体の意識を反映するものではない。BKNSの普遍的な意識を調査するためには、より広い範囲におけるインフォーマントを対象とする必要がある。今後の課題としたい。